

西

正

の
ま

和田
島藤下
佐山野
安

合同句集

四匹のうま

合同句集 四匹のうま

昭和三十九年十二月十五日印刷

昭和三十九年十二月二十日発行

著者・田島和雄・佐藤守・山下実
・安野文智・印刷所・七曜印刷・
発行所・東松山市本一・七曜発行
所・頒価・三百五十円・送料共

目次

序	永井由清	2
若葉無限	田島和雄	11
「娶る僕」以后	佐藤守	53
冬灯	山下実	95
傷雲	安野文智	137
跋	鈴木良太郎	179
あとがき	田島和雄・佐藤守 山下実・安野文智	185
題字	田島和雄	
写真	山下実	

序

永井 由清

寒長し児にきらわるる一玩具

田島和雄

田島和雄氏は、太いペン先で繊細な詩情を綴る。

重量感に溢れた作風と内律の緊張した美しさは、よく照応して鑑賞の安定を助け、生活背景の厚みを活かしてすぐれた創作力を発揮する。

田島氏は好んで名詞止めの句を多用するがこれも氏の性格の表われで、重心を低くして印象の流出を避けようとする、働きを考えてのことらしい。また他に類をまねきやすい措辞のいくつかも、この章においてはほぼ成功していると思う。

飽くまでも日常に即そうとするつよい姿勢と、詩に極めて敬虔な一学徒――が表裏のごとくに密着して、和雄俳句の今日性を位置づけている。

人等群れ癖 裸並木は等間隔

佐藤 守

私と相知ったころの佐藤氏はまだ俳句を書かなかった。映画の時評や劇評などの筆を執って、文学への関心を見せていた。

佐藤氏の眼は対象にはげしく迫りながらも、究極にまで追い詰めることをしない。時に呟くように、あるいは磨けるように素面の自己を演出させる。つまり自己を語る手段としての俳句を、つねにこの距離でとりあつかうところに、氏の人生観が感じられる。

集中の吾が妻や吾児俳句に平凡な溺れをかくそうとせず、他の句にしばしば暗鬱の様相を屈折させるのは、矛盾と呼ぶよりむしろ人柄のもつ底深い温かみのゆえんだろう。

市民性の純質に根を下ろした、批判と反骨のするどさ——守俳句への期待はここに存する。

拘束され疲労し葡萄の粒太る

山下 実

切りそいだ表現に感情伏線の暗合。山下実氏はこの技法で労働の

周辺を構成する。明快にあり得ないのは氏の青年性にあり、青年の意識に影響する、社会一般への懷疑につながる。しかしながらその作品の多くを、生まとも思われる私的観念で描いているのは、氏が主義の作家としての道を選んでいないことを示す。

ともあれ、山下氏の資質ははなはだ敏く、かつ異色でもある。この系列の作品に欠けがちな、「人間」を富ましてくる実俳句への共感は尽きない。

田搔牛追う一角に茜冷え

安野文智

安野文智氏の抒情は、初期において培われた、描写の鍛錬によって立体化しようとしている。俳句が、俳句以外の何物でもない証左を、緊密な語法と鮮明な観照で捉えようとする努力は、次第に実っている。農村に生い立って都会の焦点へ転じてからも、この考えに変わりは見られない。

安野氏の断面を最も深く痛切にえぐったのは、その愛児急逝前後の一連であろう。この涙によって氏の眼はいっそう研ぎ澄まされ、

俳句によって生かされている己れを自覚せずにはいられなかった。

※ ※ ※

ある日すぐれた作品が一つ生まれると、それは過去のなかへ組み込まれて、過去全体を少しずつ変えていくとする。

新しい詩集の出版も同じである（松浦嘉展）という。

四氏の過去はその作品の歴史に彫り刻まれた、人間像の変貌の道程。しかも集積された過去は、また新しい行為への生命力をもつ。

「七曜」において中核的存在の四名の友人が、共同して句集を編んだ。「四匹のうま」の動機や内容の詳説は他にゆずるとして、私はこの集から私にない異質のものを多く学んだ。それだけに貴重だと思う。読者も同様に、必ずや厚意と讃辞を以て、本書を座右に愛されるに違いない。

——うまの四氏——はそれだけの可能性と未来を十分に約束しているからである。

(1964・12・10)

竹ノ谷 ただし

同年生れで同じようなサラリーマン生活であること及び外見は類似した家庭環境にある四作家であるが、その作風感じ方が独自で個性に溢れているのはやはり本物であると感じたのである。

ある結社では作者の名前を伏せると同一人の作品が並んでいるようだという声を聞くこともあるが、同じ俳誌七曜に育った作者の個性が益々磨かれ確立されてきたことは当然のようなことながら意義が深いことだと思われる。

田舎教師の靴型古し雷どもる

教師わがズボン筒形朝より蟬

に如実に現われる田島氏の朴訥な人間像、内に才気を秘めたヌーボーたる田舎教師の慈愛深い瞳を眼鏡の奥に感じるようである。家業の商家を継がず教員生活十数年、それに成りきった姿を時には懐しみ或いは懐疑的に眺めている作者

鬱々と慣れぬ任地の菜種梅雨

の転勤の淡い感傷

夜は妻の素顔さくらは散り急ぐ
の夫婦教師の感懐

蝶追いし嬰の瞳が妻の瞳へ返る

嬰の眼癒え再び雪を得し遠嶺
の愛児に映した作者の像、やがて

揚雲雀捨て瓶すでに野の日屑

鳥雲に竈より出でて土器素直

等の優しいなかにも力強い作品となるのである

佐藤氏は又

吾が過去は秋風の葦父となる

の一句の如く風にも吹き折れぬ葦の如く人生を闘ってきた。四氏に
共通したことだが戦時中の少年時代、特に氏は病氣との闘い、家庭
環境の激変、多感な少年時代には強すぎる試練であつたであろうが
精一ばい生き今愛妻、愛児との自分の生活を享受する感懐が一句に
尽きている。

愛がささえ落葉も積めば暖かし

妻の香に既に犯さる秋灯下

の諦観にも似たあたたかさ

人間不信身の八方に冴え迫る

春愁やどこへ行っても人に逢う

人を真に愛する故の人間嫌い

一つの職に汗して蹉跌かと思ふ

春めきしひかり重たく職に倦む

限定された職の時にはかなしさや或いは大きな希望への疑い。それ

等の生活の奥には

母逝きし記憶の夜に花降らせし

永別した実母への思慕が作者の中に生き続けるのである。

駅前の飯屋蒸気へ灯ともせり

油泌む手で喫う煙草労働祭

樺散り夜の汽罐車火を充実す

鉄道員の山下氏はスマートな好青年であるが内面には働く人の厳し

さがびちびち感じられる

折返すマラソンの上梅固し

高麗に来て太きサイレン蝶流る

間接的に俳人鉄道員の大らかさが詠われ

串に返る寒鮎午后の日曜日

七分咲く梅を花瓶に平和な妻

秋晴れの総て妻の声聞こゆ

平和な生活、平穩の休日、読んでいて実に楽しい。

残雪を見る旅館裏栗鼠くさい

貯水池の水涸れ光るキャベツの花

等の明確な描写

作者に好日月の続くことを思うのである。

東京生活の安野氏の作品は絶えず故郷の田野を詠いオーソドックスの作風であるが、時にびりびりした詩情の昂まりを感じる。

田搔牛追う一角に茜冷え

早乙女の雇われて病む他郷かな

畦塗りの呼ばれて去りぬ日高きに

の一聯の作品に詠われている農生活の哀歎

梅雨明けの岳に落ちこむ銀河漫し

うつむきて麦踏む人へ海の照り

の格調高い写生句。

やがて愛児の急逝に痛惜を越えた詩情の昂まりは胸をしめつける。

雲なき日病舎の崖に笹鳴けり

冬星へ還る児を抱き病舎出づ

児を埋めに帰る暖冬のバス弾む

八方に枯草伏せり陽の墓標

青葉木菟児の死後目覚め易き夜々

幼い愛児の宿痾の心臓疾患を癒そうと全力を尽した甲斐もなく星と
なつたいとし子への痛惜を詠い珠玉の作品とした作者魂には頭がさ
がる思いである。

人生の最盛期、俳句の壮年期を迎えた四作者が俳句を通じてより
大きな人間形成の道を進まれることを念じて筆を擱く。

若
葉
無
限

田
島
和
雄

田 島 和 雄

埼玉県東松山市松葉町三四八三の八五

昭和五年一月 東松山市生

教 員

昭和二十六年句作を始め「馬酔木」
を経て「麦」に入会。二十八年「七
曜」創刊と同時に参加現在編集同人。

吾が唄を児が継ぎうたう春の雪

東風と旅へ少年のごと妻の前

旅立ちや東風へ翔つ鳩胸光り

芽木となるペース崩さず夜の潮騒

揚雲雀捨て瓶すでに野の日屑

打鋌音裂け春雪の脚みだす

少年に明日無し野火を狂わせて

卒業歌果てて遠野に陽の起伏